彦根キャンパス滋賀大学講堂にて

第14代 滋賀大学長
竹村 彰通

Profile
1952年生まれ。1976年東京大学経済学部卒業、1978年東京大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史学専門課程修士課程修了。米国スタンフォード大学統計学部客員助教授、米国パーデュー大学統計学部客員助教授、東京大学経済学部教授、東京大学大学院情報理工学系研究科教授を経て、2015年5月滋賀大学に着任。2017年4月から滋賀大学データサイエンス学部長、2022年4月から現職。

学長就任メッセージ

未来創生大学をともにつくっていこう

新時代に必要な基礎力を育む場に

このたび新しく学長に就任しました。今後4年の私の任期中、「未来創生大学『滋賀大学』」に向けて、大学の教育・研究そして社会との連携を推し進めていく所存です。この4月より、本学の第4期中期目標・計画の6年間が始まります。新学長としての私の最も重要な仕事は、この中期目標・計画で掲げられた目標を確実に達成していくことです。この中期目標では基本的な目標として、未来創生に貢献する大学をめざすこととしています。

教育面では、未来を見据えた文理融合教育を推し進めていきます。滋賀大学のこれまでの伝統と実績の上に、深い専門性とともに新時代に必要とされる基礎力を育むことをめざします。新時代に必要とされる基礎力のキーワードとしては、リベラルアーツとデータサイエンスリテラシーがあげられます。リベラルアーツは、複雑化した現代社会の問題を解決するために必要とされる文理を問わない幅広い知識や、複合的な視点からのアプローチができる総合力の養成を意味しています。データサイエンスは問題解決のためにデータを活かすことです。

研究面では、分野をこえた融合的な研究を促進します。また大学の運営面では、社会との連携を重視した運営及びデジタルトランスフォーメーションによる業務の効率化をめざします。

一昨年の冬に突然発生した新型コロナウイルスの感染は予想もしなかったような大きな変化を社会にもたらしました。大学では、対面授業が制限され講義をオンラインでおこなわざるを得ない状況が生じました。企業等でも、在宅勤務が急速に進むなどの変化が一気に進みました。コロナ禍によって文化的な活動が制限されるなど厳しい状況となりましたが、一方で私たちにはこれまで当たり前と思っていた習慣や仕事のやり方を見直す機会ともなりました。地方創生の観点からは、コロナ禍による変化は地方にとってチャンスと捉えることもできます。コロナ禍は都市への資源の集中のあやうさを明らかにしました。このような社会の大きな変化の中で、未来創生大学の具体化をめざしたいと考えています。

以上のような目標の達成は、学生の方たちを含め、大学の構成員が一丸となって取り組むことによって初めて可能となるものです。未来創生大学をともにつくっていきましょう。